

## 令和3年度 総合政策学部 帰国子女選抜

### <出題意図>

総合政策学部の学生には、社会や自然環境等に広く関心をもち、それらの理解に必要な情報を適切に関連付けながら問題を発見し、その解決策を導くための論理的思考能力・想像力が求められる。しかしながら、そのプロセスは決して簡単なものではない。さまざまな学問領域の知見を特定の社会問題に適用しようとする場合、しばしば矛盾が生じるためである。このとき、自分のベースにおく学問と他の領域の学問の間になぜ矛盾が生じているのか、自分とは全く異なる立場からのアプローチの在り方を把握し、矛盾を解きほぐさなければならない。そこで必要となるのは、論理的思考能力と想像力である。異なる領域のアプローチは自分の領域の常識的知識や前提が異なっている。そうした前提となる知識があいまいな状況の下で、論理力と想像力を駆使して、矛盾を一定程度解きほぐさなければ、特定の社会問題に対する解決策は見えてこない。

本課題はこれらの論理的思考能力と想像力を測定することを目的としている。文章自体は読みやすいのだが、おそらく受験生にとっては非常識な事柄を論じている論考をとりあげ、文章の論理展開をどこまで追うことができるのか、粘り強い論理的思考能力と想像力を試す課題となっている。

### <解答例または考え方>

1 15点×2

「モノのやりとりに差しはさまれた「時間」」(19字)

「贈り物らしさ」を演出する表面的な「印」(20字)

2 30点

日本人の多くは物乞いに「なにもあげない」ことを選ぶ。「交換のモード」に慣れていると、対価のないお金のやりとりが不道德なものに感じられ、お金が何らかの代償との「交換」を想起させることになる。物乞いが、わたしたちのために働いてくれるわけでも、なにかを代わりにくれるわけでもないのだから、彼らにお金を払う理由はない。多くの日本人は道端で物乞いの老婆を目にしたときも、この交換のモードをもちだし、老婆の共感を引き起こしそうな表情とか、身なりとかを見なかったことにして、他人への共感を抑え込むのである。筆者はこのことを、「きまり」に縛られて身動きがとれなくなっていると表現している。(286字)

(採点基準)

- \* 「きまり」に縛られている状況を適切に示している (10点)
- \* 身動きがとれなくなる理由(「交換のモード」の特質)を適切に示している (10点)
- \* 適切な具体例が示されている (10点)

3 40点

私はエチオピアの物乞いにお金は渡さないと思う。確かに、筆者のいうとおり、エチオピアの物乞いを目の前にして「与えずにはいられない」という共感が生じるかもしれないと思う。しかし、筆者のようにエチオピアの物乞いと私たちの間にある格差にまで思いをはせて、自分に「うしろめたさ」を感じたりはしないであろう。私は、物乞いへの共感が生じるかもしれないが、筆者のように「うしろめたさ」を感じることはないであろうと想像するので、物乞いへお金を渡さないであろうと判断をした。

そもそもエチオピアの物乞いにもそれぞれの事情や背景があり、それは私たちには想像のつかないものである。そのあたりのことを考えずに、エチオピアの物乞いと私たちの間にある格差に対して「うしろめたさ」を感じるのは少し飛躍があるのではないかと考える。筆者から見れば、私が「交換のモード」に慣れきってしまっているから「うしろめたさ」を感じにくいということなのかもしれないが、私はむしろ筆者のような海外への経験がなく、物乞いを目の当たりにしていないことから生じる意見の相違のように思う。(合計 464 字)

(採点基準)

- \* 物乞いにお金を渡すかどうか、自分の立場を明確に示し、その根拠が述べられている (15点)
- \* 筆者の考えを取り入れて、自分の意見を適切に明示できている (15点)
- \* 「共感」・「うしろめたさ」というキーワードを用い、その意味内容が文脈から把握されていると判断できる (10点)